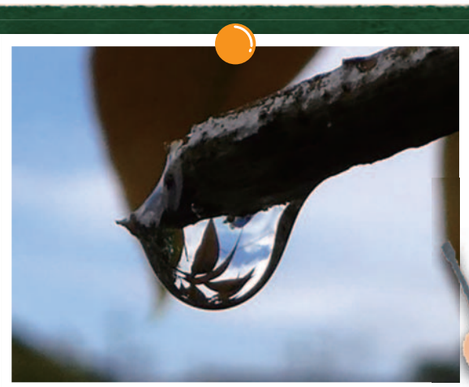
気象キャスターが解説！
天気のミカタ

連載第17回

五月雨はいつの雨？

気象キャスターネットワーク



旧暦五月は雨の季節

天気を表す言葉には「五月」のつくものが沢山あります。

五月雨と聞くと、5月の新緑に降りかかる清々しい雨を想像するかもしれませんが、実際は梅雨のこと。旧暦の5月は今の6月ごろに当たりますので、まさに梅雨期です。じめじめして五月雲が広がる日が多く、おひさまが隠されて五月闇に。梅雨の晴れ間である五月晴れの日には、遠くまで見渡せて富士山が見えます。これが五月富士です。

このように「五月」がついても6月に使われる言葉ですが、「五月晴れ」だけは現在、文字通り5月に使われることもあります。

本州の梅雨は沖縄の梅雨明け後が本番

例年、6月中には本州付近の各地で続々と梅雨入りが発表されますが、関東など本州の広い範囲では大抵、梅雨入りしてもしばらくは晴れる日が多く、気象予報士は「本当は梅雨入りしていないのではないか」と質問攻めにあいます。

本州の梅雨が本格化するのは沖縄が梅雨明けしてから。それまで沖縄付近をうろうろしていた梅雨前線が、本州にしっかりかかるようになってきます。梅雨の前半と後半では雨の降り方が変わってくるため、油断はできません。

涼しいだけだと思っていたら速かった

「五月雨を　あつめてはやし　最上川」

松尾芭蕉がみちのくの旅で詠んだこの句はあまりにも有名ですが、もともとは「あつめて涼し」でした。雨水が運ぶ涼しさを詠った、優しい句だったのです。ところが後日、下流に移動して川下りを体験した芭蕉は、思いのほか流れが速いことにびっくり。五月雨を一点に集めたように勢いよく流れ下る情景に合わせて、中の句を書き直したとされています。

山形県を流れる一級河川・最上川。水運によって山形の発展を支えた。

芭蕉をも驚かせた水の力。梅雨には景色を変える威力があるのです。

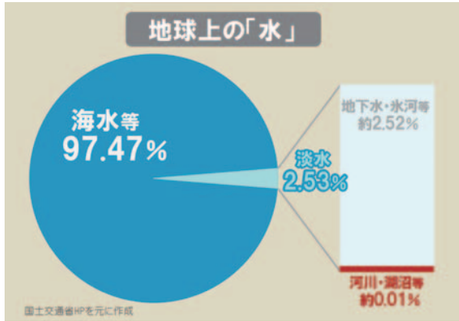
温暖化は「ちょっと怖い雨」を「すごく怖い雨」へ

去年7月の西日本豪雨（平成30年7月豪雨）は、特別な気圧配置による雨ではありませんでした。梅雨前線の停滞はもちろん大雨をもたらしますが、それ自体は昔からよく知られていることです。

しかし、本州付近に梅雨前線が停滞するという、「よくある」形のところへ、「よくある」わけではない、大量の水蒸気が流入したことで、「よくある」わけではない、記録的な豪雨をもたらしました。気象庁の担当者をして「見たことがない量」と言わしめた水蒸気をもたらした要因の一つは、地球温暖化。実際に最新の研究でも、温暖化が降水量を上乗せしたと見られる結果が出てきています。現在進行している気候変動は、ただでさえ大雨となるはずの雨を、記録的豪雨に押し上げる力があるのです。地球温暖化が進む中、再び同じようなことが起きるおそれがあります。

それでも不可欠な水資源

地球表面の3分の2は海に覆われていますし、南極にも北極にも大量の氷がありますが、河川や湖沼など私たちが使いやすい状態で存在する水は、全体のわずか0.01%ほど。約14億立方キロメートルと言われる地球上の「水」のほとんどは、意外にも手が届きにくいのです。



そうなると、淡水が直接降ってくる雨というのが、いかに貴重な資源かがわかります。

私たちが生活や農業、工業で使う水資源の大部分は、梅雨と台風、そして雪解け水。梅雨に入ると毎年のように災害が心配されますが、梅雨は私たちにとって脅威であるとともに恵みでもあるという、鋭い二面性を持っているのです。

五月雨の美しさを五感で楽しんで

芭蕉は他にも梅雨の句を残しています。

「五月雨の　降のこしてや　光堂」

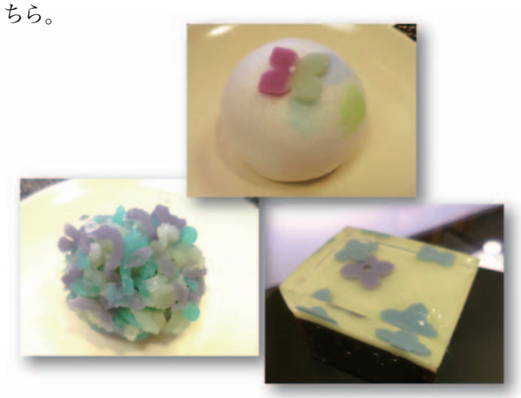
光堂は、岩手県にある中尊寺金色堂のこと。現在は世界文化遺産に登録されている、奥州藤原氏ゆかりの地です。黄金に輝く金色堂を芭蕉が訪ねたとき、雨は降っていませんでした。お堂のまばゆい姿を見て、五月雨はこのお堂だけ避けて降ったようだと感じた、芭蕉の豊かな想像力が生んだ句です。

しかも金色堂は現在、鞘堂という覆いの中に入っていますが、芭蕉が生きていた江戸時代もすでに建物の中に入っていましたから、堂が野ざらしだった平安時代まで芭蕉の脳内はタイムスリップしていたことになります。

現在の鞘堂（左側、覆堂とも）および昭和の改修までの鞘堂（右側）。芭蕉が見たのは、鎌倉時代に作られた右の建物に覆われた金色堂。

芭蕉の感受性を刺激した日本の梅雨という情景。私たち日本人には、脅威と恵みという鋭い二面性を超えて、梅雨の美しさを五感で享受できるDNAが受け継がれています。雨の音、湿った土のにおい、育まれる植物たち。五月雨の時期にしか楽しめない美しさが、そこにはあります。

そうは言っても「花より団子！」というあなたには、こちら。



和菓子屋さんの店頭にはこれからの時期、紫陽花をかたどった品が多く並びます。

七変化とも言われる紫陽花の色を表現したカラフルなものから、蒸し暑さを増す時期に涼をもたらす透明感あるものまで、職人の趣向が光ります。一年でこの時期にしか手に入らない、日本文化が凝縮された宝石。一度、手にとってみては？

Profile

竹下 愛実

気象予報士・防災士・野菜ソムリエ。
愛知県生まれ。
気象キャスターとして三重テレビ、NHK仙台、とちぎテレビを歴任し、現在は千葉テレビ「シャキット!」（TVK・テレ玉でも同時放送）を担当。